



# 「主がわたしのパイロット」

～私たちの主への信仰とは～

「愛する皆さん。この手紙を書き終えるにあたって、お願いしたいことがあります。どうか、私たちのために祈ってください。主のことが至る所で急速に広まって勝利を収め、あなたがたのところで同様、各地でも救われる人が続出するように祈ってください。」

テサロニケ人への第二の手紙第3章1節 [リビングバイブル]

キリスト教では、私たちが用いている66巻からなる聖書のことを「正典」と呼んでいます。「正典」を英語では「Canon(キャノン)」。その一般的な意味は「規準」です。ですから、聖書は私たちの人生の「規準」そのものであるということを意味しています。

新約聖書中「聖書」と書かれているものは、直接的には「旧約聖書」を意味しています。新約聖書が出来上がったのはAD400年頃なので、このパウロの時代から300年以上経ってから確立されました。では、パウロの時代の新約聖書に書かれた事柄はどのようにして伝えられたかという、今朝の第二テサロニケ3章6節に書かれてある「言伝え」によってイエス様の語られた教え、クリスチャンたちが守るべき「規準」が伝えられていきました。

ひとつの書物としての聖書が信者たちに与えられていたわけではなかったため、その「規準」をしっかりと伝えることが簡単ではありませんでした。そのため、多くの異端が現れたり、このテサロニケの人たちのように間違っただけで受け止めてしまっていたことがありました。彼らの中には、「主がすでにご再臨された」と間違っただけで受け止めてしまい、もしそうなら、一生懸命に働くこともばからしいと、アンバランスな信仰生活となっていってしまった人たちもいました。

私たちも、たとえ一冊の聖書を持っていたとしても、生きた神様の言葉として正しい信仰をもって聖書のこぼを受け止めていないと、「キャノン(正典)」が「キャノン(規準)」として私たちの人生を導かなくなってしまうことが起こりえます。しかし、逆に聖書を正しい、生ける神の言葉をして受け止めて、その信仰を成長させることができるならば、その人には100倍、60倍、30倍の実りある人生が保証されるのです。

18世紀に活躍した作曲家ベートーベンも、次のような信仰の言葉を遺しています。「全能の主よ。あなたは、私の胸の奥にある私の魂をのぞかれ、私の心を見抜いておられます。私の心の内に、人類への愛と、善をなしたいという欲求とが満たされているのを主よ、あなたにご存じます(1802)」「私には友がいない。独りぼっちで生きていかなければならない。だが分かっている。創造主は、誰よりも私の近くにおられるのだ。恐れずに、私は神に近づく。どんな時でも、このお方が私と共にいることが分かる。そして私は、主がどのようなお方かということも知っている(1810)」。彼は孤独の中でも生きて働かれる神様を体験していたのです。